

「ノアの妻」再考

—ミゼリコードにみるサイクル劇の女性像—

黒川 樟 枝

中世後期から近代初期ヨーロッパにおいて、男女の性的役割や力関係を逆転させた、いわゆる、《逆さま世界》は、文学、美術、祝祭などにおける最もポピュラーなモチーフの一つであった。とくに、“virago”（女丈夫）、すなわち、男性を精神的にも肉体的にも支配することにより、自然の秩序を乱す女性像は、サイクル劇にも導入され、聖母マリアのアンティタイプとして、〈エヴァの末裔〉の汚名を着せられることになる。サイクル劇にも、いわゆる「エヴァの末裔」が登場する。とくに、Wakefield Pageants のノア劇 (*Processus Noe Cum Filiis*) に登場するノアの妻は、同サイクルの第二羊飼劇 (*Secunda Pastorum*) の羊盗っ人マックの妻ジルなどと並んで、共にその典型的な女性像と言えよう。

これら“virago”タイプの女性を創造する場合、作者が典拠としたものを、文献的に実証することは難しい。しかし、例えば、当時の美術、とくに、庶民文化の隠れた宝庫とも言うべきミゼリコード (misericord—教会クワイヤ席のたたみこみ椅子の裏に取り付けられた持ち送りの彫刻) などに見られる女性像と比較、検討することによって、そのルーツを間接的に探ることが出来る。ミゼリコードには、サイクル劇の“virago”と同じタイプの女性像を、数多く見出すことが出来るのであり、両者の女性像には明らかに密接な対応関係が認められる。すなわち、両者は共に、当時のフォークロア (民間伝承・慣行・祝祭など) から、その素材の多くを借用していることが明らかとなるのである。

本稿では、とくに、ウェイクフィールド劇のノアの妻ジル (Gill) に焦点を据え、中世後期のミゼリコードとの比較、検討を通して、サイクル劇の女性像におけるフォークロア的モチーフについて考察する。さらにまた、中世サイクル劇の解釈において、フォークロア、とくに、民族慣行や祝祭面から考察することの重要性を指摘したいと思う。

中世後期のミゼリコードに頻出するモチーフの一つは、嬖天下の女とその尻に敷かれた夫という組み合わせである。既成の社会秩序や規範を逆さまにしたこの《逆さま世界》は、ウェイクフィールド劇の顕著な特質であるが、それは、ノア夫妻の関係にも認められる。洪水から避難するため、箱舟を建造して、家族共々乗船することを神から命ぜられたノアは、妻との間に

一悶着起きることを恐れつつ帰宅する。案の定、妻ジルの悪口雑言と癩癩が彼を待ち受けている。

Vxor. Now, as euer myght I thryfe, the wars I the see.

Do tell me belife, where has thou thus long be?

To dede may we dryfe, or lif, for the,

For want.

When we swete or swynk,

Thou dos what thou thynk,

Yit of mete and of drynk

Haue we veray skant.

Noe. Wife, we ar hard sted with tythyngys new.

Vxor. Bot thou were worthi be cled in Stafford blew,

For thou art alway adred, be it fals or trew.

Bot God knowes I am led—and that may I rew—

Full ill;

For I dar be thi borow,

From euen vnto morow

Thou spekys euer of sorow;

God send the onys thi fill!

(*Processus Noe Cum Filiis*, 192-207)¹

「食べ物も飲み物も底をついたひどい暮らしのなか、家長のあんたは長いことどこで遊び惚けていたのか。わたしが汗水垂らして、糸紡ぎに励んでいるというのに、あんたときたらいつも勝手にし放題、不平ばかりで、もう顔を見るのもうんざりだ。スタフォードの青布のような青あざが出来るほど、ぶん殴られて当たり前だよ」とジルは夫を罵る。口論昂じて、殴り合いの喧嘩となるが、より多く相手を殴りつけたのはジルの方(238)である。二人の争いは、箱舟の乗船間際にクライマックスに達し、ジルは、この箱舟について、「前と後ろの区別も付かないような奇妙な家に閉じ込められるのは御免だ。あんただけ逃げればよい、わたしは糸紡ぎの用がある」(235-43; 328-414)、と頑として言い張るので、またぞろ、派手な取っ組み合いの喧

嘩となる。

ところで、ノアや箱舟がもつ象徴的な意味については、従来、予型論 (typology) 的な解釈が支配的であった。すなわち、聖アウグスティヌスも、その著『神の都』で述べているように、ノアは、木(十字架を表す)と水(洗礼を表す)によって人類を救うイエス・キリストの予型であり、また、箱舟は、神の都(教会)を表すものとされた²のである。この解釈に従えば、箱舟の乗船をかたくなに拒むノアの妻は、教会に入ろうとしない不信心者、悔悛を拒む罪人と見なされた。しかし、ノア夫婦の争いの場面を、中世後期のミゼリコードに描かれた家庭不和の場面と比較、検討してみると、例えば、ノアの妻ジルについても、そうした従来の定見とはやや異なる解釈を施しうるように思われるのである。以下、実際にそれらのミゼリコードを参考に、考察を続けることにする。

英国に現存する中世後期のミゼリコードのうち、家庭不和(夫婦喧嘩)を扱ったものは、推定を含めると、約20枚に達する。興味深いことにこれらのミゼリコードでは、暴力を振るうのは常に女の方で、男が殴り返す例は稀有である(以下、図版 pp. 18-25参照)

(1) Beverley (Humberside), The Minster. (1391?)

a) N(U f.W)17³ 車輪のついた舟型の車に、がみがみ女房を乗せて、水辺へ引っ張って行く男。男の髪を引っ掴む女

b) N(U f.W)18 男の髪を引っ張る女。ポットの中身を漁る犬

(2) Boston (Lincolnshire), St. Botolph's. (ca 1390)

N(U f.E)8 女の暴力を右手でかわそうとする男は、左手に弓、腕に矢を抱えた狩人の姿。男の顎を引っ掴み、糸巻棒で殴りつける女

(3) Bristol (Avon), The Cathedral. (late 15th C)

a) S(f.W)11 調理用ポットの蓋を取ろうとする男の口髭を掴む女。女の投げた皿が夫の耳元を掠める

b) S(f.W)2 後ろ向きに馬に乗せられて、辱めを受ける男

(4) Carlisle (Cumbria), The Cathedral. (1399-1413)

S(f.W)7 男の口髭を引っ張り、洗濯用の小槌で殴る女

(5) Chester (Cheshire), The Cathedral. (ca 1380)

N(f.W)13 足元に膝づく男をシチュー鍋で殴りつける女

(6) Ely (Cambridgeshire), The Cathedral. (ca 1340)

- S(L f.W)16 男の頭を殴り両膝を蹴る女。男は右親指を女の口に突っ込んでいる
(7) Fairford (Gloucestershire), St. Mary's. (late 15th C 1490?)
a) S(f.E)7 ひしゃくで男を殴る女
b) S(f.E)14 男の髪を掴み、木のひしゃくで殴りつける女
(8) Great Malvern (Hereford & Worcester), The Priory Church.
a) N(U f.W)3 (1350 to 1380) 泥酔した男を殴る女。革製ボトルの酒を飲む、寝そべったもう一人の若い男
b) N(U f.W)5 (ca 1480)
水汲みを怠けた男を糸巻棒(欠損)で叩く女。償いに、女が靴を脱ぐのを手伝う男
(9) Hereford (Hereford & Worcester), The Cathedral. (1380 or earlier)
S(U f.E)8 女が投げた皿を右手で避ける男。その左手は女の足首を引っ掴む
(10) Lincoln (Lincolnshire), The Minster. (late 14th C)
S(f.E)21 男の髪を掴んで殴りつける女
(11) London (Westminster), The Abbey, Henry VII's Chapel. (ca 1509)
a) S(3rd bay, L f.E)6 糸玉と糸巻きを握った男の剥き出した尻を、カバの枝鞭で打つ女
b) S(3rd bay, L f.E)7 倒れた男を糸巻棒で殴る女
(12) Manchester (Great Manchester), The Cathedral. (1506 or earlier)
N(f.W)5 喧嘩に負けて(?)逃げる男を追い掛ける女。二人の間に転がるポット
(13) Nantwich (Cheshire), St. Mary's (14th C)
S(f.W)7 ひしゃくで男を殴る女
(14) Ripon (North Yorkshire), The Cathedral. (1489-94)
S(f.W)9 三輪の手押し車に乗せた女を(水辺に?)引っ張って行く男
(15) Stratford-upon-Avon (Warwickshire), Holy Trinity Church. (late 15th C)
a) S(f.N)9 がみがみ女の一生。(右)悪口雑言を吐いた口に、口輪をはめられている。(左)舌を突き出した顔
b) S(f.W)12 男に乗せたスフィンクス(人間の頭、ライオンの体をもった空想の動物。(左サポーター)互いに相手の顔を引っ掻く男女。(右 サポーター)裸女の足を掴んで、カバの枝鞭で叩くマント姿の男
c) S(f.W)13 喧嘩をする男女。男の髭を引っ張り、シチュー鍋で殴りつける女
(16) Tewkesbury (Gloucestershire), The Abbey. (15th C)
N(f.E)2 仰向けに倒れた男を、洗濯用の木槌で殴りつける女

(17) Whalley (Lancashire), St. Mary's. (early 15th C)

剣と楯を持って膝づく武士を、フライパンで殴り付ける女

男のノアにとって、妻を殴打することは、不従順で強情な妻に懲罰を加えるという矯正的な意味を持つ。また、女のジルにとって、夫を殴打することは、日常生活のうっ憤を晴らし、家庭の秩序を維持するための《安全弁》、または《捌け口》を意味している。この夫婦の争いで、常に主導権を握るのは、夫に反抗し、罵言を浴びせ掛け、暴力に訴えた妻のジルの方である。例えば、妻を殴り返すウェイクフィールドのノアとは異なり、チェスター劇のノアは、妻に殴られても、殴られっ放しで、立腹することさえしない。彼は、「おとなしくするのが勝ち」(“Aha, marye, this ys hotte;/yt is good to be still.” 247-48)⁴と言うだけで、《尻に敷かれた》気弱な夫の役割に徹している。

一方、ウェイクフィールド劇のノアの妻は、

If he teyn, I must tary, howsoeuer it standys,
With seymland full sory, wryngand both my handys
For drede;
Bot yit otherwhile,
What with gam and with gyle,
I shall smyte and smyle,
And qwite hym his mede.

(210-16)

「夫が腹を立てたら我慢するだけ、でも、別の機会を狙って、手練手管で仕返しをしてやる」と言うが、このジルの言葉は、彼女が夫に加えた殴打の、真の動機を知るのに役立つ。すなわち、彼女のこの言葉には、性的な含みがあると思われる。ジルが夫に加える暴力は、不甲斐ない夫に対する性的な懲罰と見なすことが出来るのである。

妻が夫を殴る行為が、本質的に性的懲罰の意味を持つことは、ミゼリコードの例でも明らかである。例えば、(11-a)の Westminster Abbey の例に見られるように、まず、女が男に馬乗りになるポーズは、アリストテレスと娼婦フィリスの例を引き合いに出すまでもなく、男に対する女の性的な優越と支配を表すものであり、とくに女が男の尻を打擲することは、男の生殖機能に屈辱を与えること、その結果として、女性上位を獲得することを意味していた。それは、

男女の《キュロット争奪戦》という、13世紀のフランスに生まれ、14世紀のヨーロッパ各地に広まったイコノグラフィからも明らかである⁵。もともと、キュロット(男性用半ズボン)は、男性支配の衣装的象徴である。それ故、男の半ズボンを手に入れようと争う女は、男性支配への欲求を示しているのである。ノアの妻もまた、夫のズボンを締める革紐を使って、夫を殴りつけている。

Bot I suppose
I shal not in thi det
Flyt of this flett:
Take the ther a langett
To tye vp thi hose! [Strikes him.
(221-25)

この場面のノアは、ベルトを締めずにズボンをはいているか、あるいは、ズボンを脱いだままの状態と考えられる。

ボストン(2)、モールヴァン(8-b)、ウェストミンスター(11-b)などのミゼリコードの例に見られるように、糸巻棒(distaff)のような道具で男を殴ることもまた、性的な懲罰を意味している。多くの女性が糸を紡ぐ仕事に携わっていた中世においては、糸巻棒は、糸玉と並んで女権のシンボルとされていた。一方、糸巻棒は、その形の類似性から、男根の象徴、または、生殖力のシンボルとして、しばしばヨーロッパのカーニバルや祝祭の行列に登場している。実際、ヨーク市のノア劇では、立腹したジルが、ノアを糸巻棒で叩いている。さらに、このウェイクフィールド劇でも、ジルは糸を紡ぐのに忙しく、いつも糸巻棒を手に行しているのだから(“... I haue on this hill spon a space/On my rok” 337-38)、この棒でノアを殴りつけるのは、ごく自然の成り行きと言えよう。ちなみに、ディグビー写本の「幼児虐殺」(*Killing of the Children*)に登場する臆病な兵士 Watkin もまた、妻の尻に敷かれっぱなしの男である。

And if I fynde a yong child, I shalle choppe it on a blokke!
Though the moder be angry, the child shalbe slayn!
But yitt I drede no thyng more thanne a woman with a rokke!
....
The most I fere is to come amonge women,

For thei fight like deuelles with ther rokkes whan þei spynne!

(157-59; 223-24)⁶

糸巻棒を握った女ほど恐ろしいものはない、とワトキンは言う。彼はヘロデ王の騎士に取り立てられることを願って、幼児虐殺に参加したものの、幼児の母親の一人に槍で突かれて、敢え無い最後を遂げてしまうのである。さらにまた、ノアの妻ジルがノアを打つのに用いた革紐(224)は、ウェストミンスター(11-a)、ストラットフォード(15-b)のミゼリコードに見られる枝鞭と共に、男性器官の象徴とされた⁷。一方、ブリストル(3-a)、カーライル(4)、チェスター(5)、フェアフォード(7)、ヘリフォード(9)、マンチェスター(12)、ナントウイッチ(13)、ストラットフォード(15-c)、テュークスベリ(16)、ウォリー(17)などに見られるように、皿、ポット、シチュー鍋、ひしゃく、木槌、フライパンなど、女権のシンボルである台所用品を男に投げ付けたり、それらを武器として男を叩いたりすること、あるいは、ベヴァリー(1-b)、ブリストル(3-a)、カーライル(4)、フェアフォード(7-b)、リンカン(10)、ストラットフォード(15-c)の例のように、男の髭や髪の毛をひどく引っ張ったりする行為⁸も、いわゆる、性的に「弱い夫」を嘲笑する意味を持つものであった。

N-タウン・サイクルを除く総てのノア劇のなかで、ノアの妻は、箱舟への乗船を拒んで、夫を殴ることになっているが、この事実は注目に値する。何故ならそのことは、この打擲のシーンが、地域や作者の相違によって生まれたものではなく、当時の民族慣行という共通の文化的土壌から発生したものであることを示しているからである。この場合、《打擲》は、一種のシャリヴァリの行動である。14世紀から近世初期に至る長い歴史をもつこの民族慣行は、本来は、社会規範の逸脱者に対する矯正や制裁的な意味を有していた。しかし、その主流はやがて、亭主を尻に敷いた女や妻に殴られた男を、はやし立て嘲笑する《嬖天下のシャリヴァリ》⁹として、祝祭やカーニバルなどの行列の中に取り入れられて、祭りの行列の重要な演目の一部となるのである。当時の英国には、がみがみ女房や、その妻に殴られる不甲斐ない夫を、町民や村人たちが人前に引きずり出して行列を組み、鍋蓋、金属性の食器などを叩いて鳴らす《鍋・釜音楽》(rough music)を奏でながら、はやし立て嘲笑して練り歩く、《嬖天下のシャリヴァリ》なるものが行われていた。このシャリヴァリは、“skimmington (or skimmety),”¹⁰ (イングランド南部、西部); “rough music,” (イングランドのほぼ全域、特に、中部と南部); “riding the stang,” (「棒乗り」スコットランド低地とイングランド北部); “ceffyl plen” (「木馬」ウエールズ)¹¹など、地域による呼称の相違はあっても、当時のイギリスで広く行われていた民族慣行であった。例えば、イギリス南部、西部地方で行われた《スキミントンまたはス

キミティー》の行列では、驢馬または馬に後ろ向きに乘せられた(逆さま世界や屈辱を表す)夫を、女房がミルクを掬うひしゃくなどの道具で殴りつけた。実際、Bristol Cathedral のクワイヤ席(S f.W 2 図版3-b 参照)には、後ろ向きに馬に乘せられて、辱めを受ける男のミゼリコードが残されている。似たような祭りは、英国全土に見られ、特別仕立ての山車の上で、糸巻棒や、ひしゃく・フライパンなどを握った女房が、亭主をひどく殴りつけたり、その一物を蹴ったりする場面が演じられた。時には、隣人が問題の夫の代役を勤めることもあったが、その場合、家庭内の夫婦の争いの経緯を、身振りを交えて演ずることを求められた。このように、社会的な制裁や嘲笑のために、パフォーマンスが行われたという意味において、スキミントンの行列は、演劇と不可分に結び付いた行事でもあった。また、それは祭りの山車の重要な演目の一つでもあった¹²。

しかし、公衆の面前で嘲笑や制裁の対象とされたのは、不甲斐ない夫だけに限らない。嬖天下の女房にもまた、別の似たような運命が待ち受けていた。ベヴァリー(1-a)やリボン(14)のミゼリコードには、自然(家庭)の秩序を破った“virago”を懲らしめる場面が彫られている。じゃじゃ馬女房を舟型、または箱型の手押し車に乗せて、水辺へ急ぐ夫の姿である。これは、“ducking stool”とか、“cocking stool”¹³(水責め椅子)などと呼ばれる一種の公衆による制裁手段であって、椅子や手押し車などに縛り付けた“virago”を、水辺へ引っ張って行き、水責めにして、改悛を促すものであった¹⁴。“virago”を見世物にし彼女を懲らしめる手段として、この“ducking stool”と呼ばれる社会制裁が、どの程度、当時の英国で実施されていたのか、詳しいことは分からない。しかし、15世紀末までに、少なくとも22件の実例が記録に残されている¹⁵。また、地理的には、Scotland, Ireland, Cornwall, Preston, Clare (Suffolk), King's Lynn (Norfolk), Coventry, Beverley, Chester, London など、英国のほぼ全域で、この種の制裁がなされたことが明らかにされている。“ducking stool”には、先に述べたような、椅子、またはそれに似た固定式の刑具のほか、形は不定だが引っ張って動かすことの出来るもの、例えば、上述のベヴァリー、リボンのミゼリコードに見られるような、車輪のついた手押し車があった。ベヴァリーの例のように、舟を形取った車もあった¹⁶。この車に“virago”の女房を乗せて、町中を引き回し練り歩いた。いずれの場合も、それは刑罰としては軽いもの、刑罰というよりはむしろ制裁と言うべきものであって、その目的は、問題の女性の肉体に拷問を加えることではなく、彼女の破廉恥な行為を、彼女の身内、隣人、知人を含む公衆の面前にさらして、これをからかい、改悛を促すことにあった。“ducking stool”の制裁もまた、時代の推移と共に、やがて祝祭やカーニヴァルの時期に合わせて、行列の一部に加えられることになるが、この事実は注目に値する。何故なら、この慣行もまた、先に述べた《嬖天下のシャリヴァリ》同様、公

「ノアの妻」再考

衆の参加を不可欠の条件としており、「ゲーム」、「遊び」、「出し物」風の特徴を次第に強めて、演劇との距離を狭めていったからである。

N-タウン・サイクルのノア劇を除く総てのノア劇で、ノアの妻は、例外なく様々な難癖や理由をつけて、箱舟の乗船を拒む。チェスター劇のノアの妻は、女友達の同行なしには厭だ(201-04)、と言う。ヨーク劇では、町の自宅に残してきた家財道具を、取りに戻るから駄目だ(“Nay, nedlyngis home me bus,/For I haue tolis to trusse” 109-10)¹⁷と言う。ウェイクフィールド劇のノアの妻は、急ぎの糸紡ぎの仕事があるから、絶対にお断りだ(“Till I haue on this hill spon a space/On my rok” 337-38)、と言う。息子の嫁の一人が、「糸紡ぎなら、舟の上で出来ますよ」(361)と乗船を促すが、ジルは家族の誘いに向いて耳を貸そうとはしない。

従来、ノアの妻が、こうして乗船を拒否する理由は、いずれも世俗的な欲求、現世への執着を表すものと解釈されてきた。しかし、ウェイクフィールド劇の場合、ノアの妻には、気が重い別の理由がある。箱舟の形が気に入らない、と言ってジルは夫を罵る。

In sich an oostré as this!
In fath, I can not fynd
Which is before, which is behynd.
Bot shall we here be pynd,
Noe, as haue thou blis?

(329-33)

ジルは、この「前後の見分けも付かない宿屋」(1.331)のような異様な形の箱舟を見て、不安を隠し切れないのである。こんな奇妙な箱に「閉じ込められて」(“bard” 328; “pynd” 332)、洪水の真っ只中を航行することを恐れるジルの意識下に、“ducking stool”の恐怖を読み取ることが出来るのではあるまいか。中世の庶民が見慣れたこの懲罰は、悪妻を車(舟型車の例もある cf. 註16)に閉じ込め、町中を練り歩いた後に、川、池、海辺などへ引っ張って行き、水責めの仕置きをするものであった。夫を殴りつけ、暴言を吐いたノアの妻もまた、箱舟に閉じ込められて、40日夜、水の試練を受けねばならないのであり、この両者の類似性に、中世庶民の粗野なユーモアを読み取ることが出来る。

ミゼリコードに描かれた“virago”との比較を通して明らかとなるノアの妻の特質は、その祝祭的・カーニヴァル的の特質である。夫に向けられた彼女の暴力、打擲、暴言、性への言及といったものは、総て祝祭の本質を形作る重要な要素である。例えば、ノア夫婦の争いの場面で

使われた語句や表現には、殴打、食欲、性欲、排泄など、祝祭やカーニヴァルの根本思想を表すものが数多く用いられており、互いに相手に投げ付ける野卑でエネルギーギッシュな罵言は、ノア夫婦こそ、カーニヴァルの主役であることを示している¹⁸

サイクル劇のノアの妻の特質は、まさに、こうした祝祭的・カーニヴァル的な特質である。彼女の旺盛な生命力と豊饒のイメージは、殴り合い、打擲、罵言などの負の要素を経て、古きものを捨て、新しい生へとつながっていくのである。前にも述べたように、ノアの妻の頑な乗船拒否については、従来、類型論に立脚した寓意的解釈が重視されてきた。そうした解釈の正統性は疑いようもないが、しかし、サイクル劇のノアの妻を、英国のフォークロアが生み出した典型的な女性として、すなわち、厳粛さと生真面目さを、粗野で陽気で伸びやかな民衆の笑いで包み込んだ祝祭のシンボルとして、見なしうることもまた事実なのである。中世の人々にとって、サイクル劇が上演されたキリスト聖体節は、キリストの十字架の死がもたらした人類救済の意味を、新たに想起する厳粛な祭りの時であったのみならず、華麗で賑わしい行列が、粗野で無遠慮な民衆の笑いを運ぶ楽しい遊びの時でもあった。この事実を、我々は決して忘れてはならないのである。

註

1. 本稿における *Processus Noe Cum Filiis* からの引用は、A.C. Cawley, ed. *The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle* (Manchester: Manchester Univ. P., 1958) に依拠する。
2. Cf. Saint Augustine, *The City of God*, tr. Philip Levine, Loeb Classical Library, No.414 (Cambridge: Harvard Univ. P., 1966), Book XV, xxvi.
3. 以下、本稿で用いられた Abbreviations は、次の通りである。N=north; S=south; E=east; W=west; f=from; U=upper row; L=lower row
4. R.M. Lumiansky & David Mills, eds. *The Chester Mystery Cycle* (London: Oxford Univ. P., 1974), EETS, SS3.
5. キュロット争奪戦を主題とする15世紀ミゼリコードが、フランス、ルーアン(Rouen)市のノートルダム大聖堂に現存する。また、画家イスラエル・ヴァン・メッケネム(Israel Van Mecken d.1503)の銅版画(1480)には、リールに糸を巻く夫と、夫から奪い取ったズボンをはいて、糸巻棒で夫を殴りつける妻の姿が彫られている。
6. D.C. Baker, et al., eds. *The Late Medieval Religious Plays, The Killing of the Children* (London: Oxford Univ. P., 1982), EETS, OS. 283.
7. アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店 “whip (ping)”; cf. Malcolm Jones, “Folklore Motifs in Late Medieval Art II: Sexist Satire and Popular Punishments,” *Folklore*, Vol.101 (1990), p. 72.
8. 髪の毛や髭は、不思議な魔力、霊力を持つとされ、いずれも豊饒のシンボルとされたことに由来する。

9. 《嬖天下のシャリヴァリ》については、蔵持不三也『シャリヴァリ民衆文化の修辞学』（同文館、1991年）pp. 160-91を参照。氏は、シャリヴァリを、その特質によって、婚姻シャリヴァリ、性的シャリヴァリ、強妻シャリヴァリ、闘争シャリヴァリの四つに分類している。
10. “skimmington” の名称は、女房が夫を殴るときに、ミルクの上澄みを掬う (skimming) 大形のひしゃくを用いたことに由来するとされている (Natalie Zemon Davis, “Women on Top: Symbolic Sexual Inversion and Political Disorder in Early Modern France,” *The Reversible World*, ed. Barbara Babcock (Ithaca: Cornell Univ. P., 1978), p. 168.
11. Cf. Martin Ingram, “Ridings, Rough Music and the ‘Reform of Popular Culture’ in Early Modern England,” *Past and Present*, No. 105 (1984), pp. 82-87; E.P. Thompson, “‘Rough Music’: Le charivari anglais,” *Annales. Economies-Societe-Civilisations*, XXVII (1972), pp. 285-312.
12. Corpus Christi の祝祭の行列に、演技的要素が組み込まれていく過程については、Miri Rubin, *Corpus Christi; The Eucharist in Late Medieval Culture* (Cambridge: Cambridge Univ. P., 1991), pp. 243-87) を見よ。
13. “ducking stool” については、Spargo によって、緻密で実証的な歴史的研究がなされている。John Webster Spargo, *Juridical Folklore in England Illustrated by the Cucking Stool* (Durham: Duke Univ. P., 1944).
14. 夫に悪口雑言を浴びせ掛ける、がみがみ女房の口を封じるために、口輪をかけたり、顔に鉄のくつわをはめたりしてから、彼女を手押し車に乗せることもあった。ストラットフォードの Holy Trinity Church のミゼリコード (cf. 15-a) には、その実例が残されている。
15. Spargo, *op. cit.*, 34-35.
16. 舟形車と、祝日に繰り出す山車との関係については、Peter Burke, *Popular Culture in Early Modern Europe* (London: Scolar Press, 1994), p. 184; フリオ・カロ・バロッハ (佐々木孝訳) 『カーニヴァル』, 法政大学出版局, 1987年, pp. 26-29参照。
17. Richard Beadle, ed. *The York Plays* (London: Edward Arnold, 1982).
18. 例えば、ノアとジルの、箱舟乗船をめぐる問題の争いのシーン (ll. 190-229; 325-87; 397-414) において、次のような語句が用いられている。(1) 暴力 = “be cled in Stafford blew,” 200; “smyte,” 215, 218; “Apon the bone shal it byte,” 220; “For drede of a knok,” 342; “Ar strokys good?” 382; “Thi hede shall I breke,” 387; “bete the bak and bone and breke all in sonder,” 407; “Se how she can grone,” 409 (2) 性 = “Take the ther a langett/To tye vp thi hose,” 224-25; “Ye shal lik on the whyp,” 378; “For betyn shall thou be with this staf,” 381 (3) 生と死 = “bi Mary that lowsyd me of bandys,” 210; “To dede may we dryfe or life,” 293 (4) 排泄 = “When we swete or swynk,” 195; “to thou stynk,” 381 (5) 飲食 = “Yit of mete and of drynk/Haue we veray skant,” 197-98; “drynk,” 381 (6) 罵言 = “ram-skyt,” 217; “Wat Wynk,” 382; “Nicholl Nedy,” 405.

(付記) 本稿は、第66回日本英文学会全国大会 (平成6年5月、於熊本大学) における口頭発表の原稿に、若干の加筆、訂正を施したものである

Acknowledgements

In obtaining permission to photograph the misericords, I drew on the assistance of a large number of

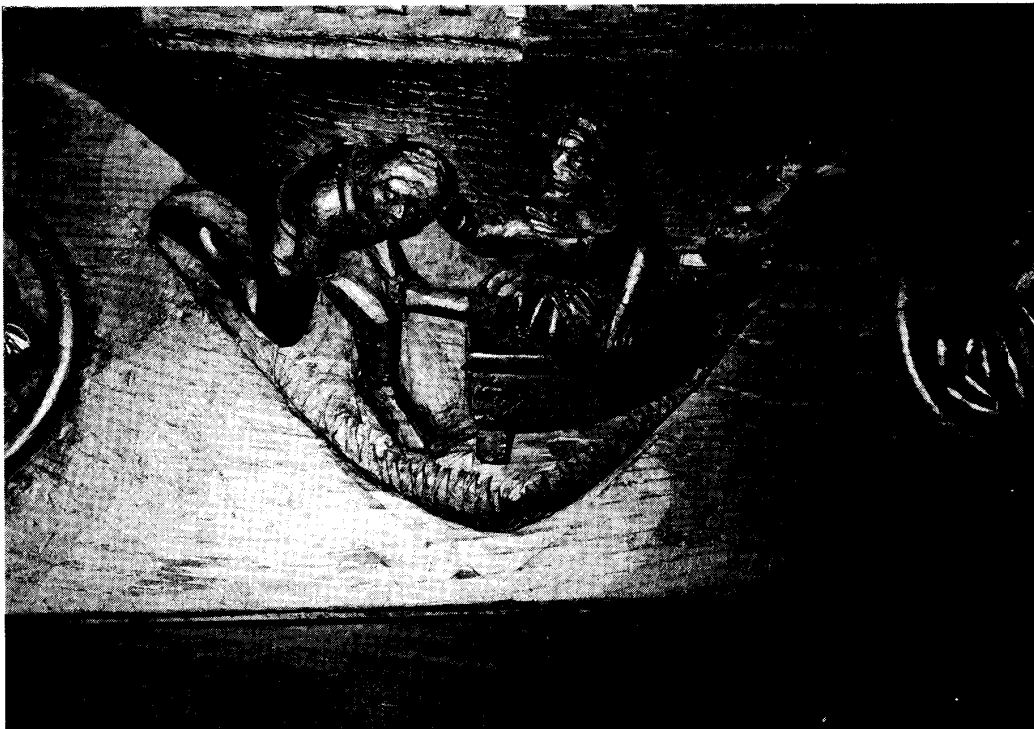
黒川 樟 枝

people. To them I give thanks. I should like to express special thanks to:

Mr. James Armstrong, Head Verger, Carlisle Cathedral, Cumbria
Mr. Julian Avins, Custos, Great Malvern Priory, Great Malvern, Hereford and Worcester
Mrs. C. E. Baines, Administrative Officer, Carlisle Cathedral
Mr. Brooks, Verger, Holy Trinity Church, Stratford-upon-Avon, Warwickshire
Mrs. Joy Coupe, Administrator, Bristol Cathedral, Bristol, Avon
Mr. A. C. Edwards, Bursar, Holy Trinity Church, Stratford-upon-Avon
Mrs. Susan Pain, Parish Secretary, Great Malvern Priory
Miss Emma St. John-Smith, Press Secretary, Westminster Abbey, London
Mr. Bill Ross, Verger, Beverley Minster, Humberside

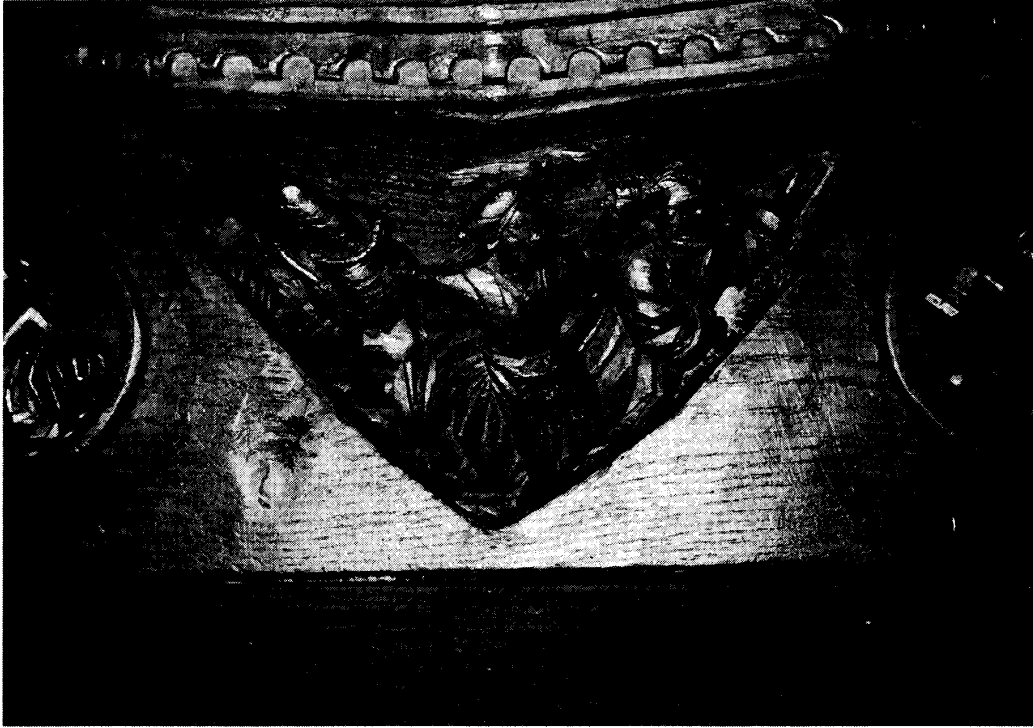
図版

(付記)各図版の番号は、本稿のミゼリコード・リスト(pp. 9-11)に記載された番号と一致する。



(1)-(a) Beverly. The Minster. (1391?) N(U f.W)17

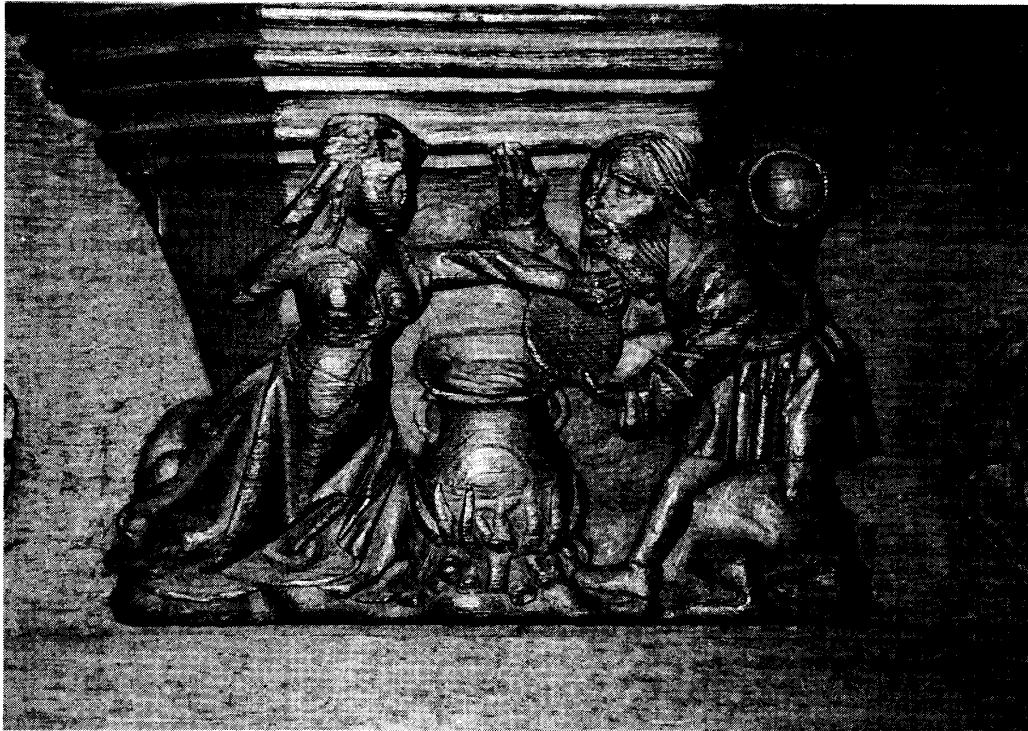
「ノアの妻」再考



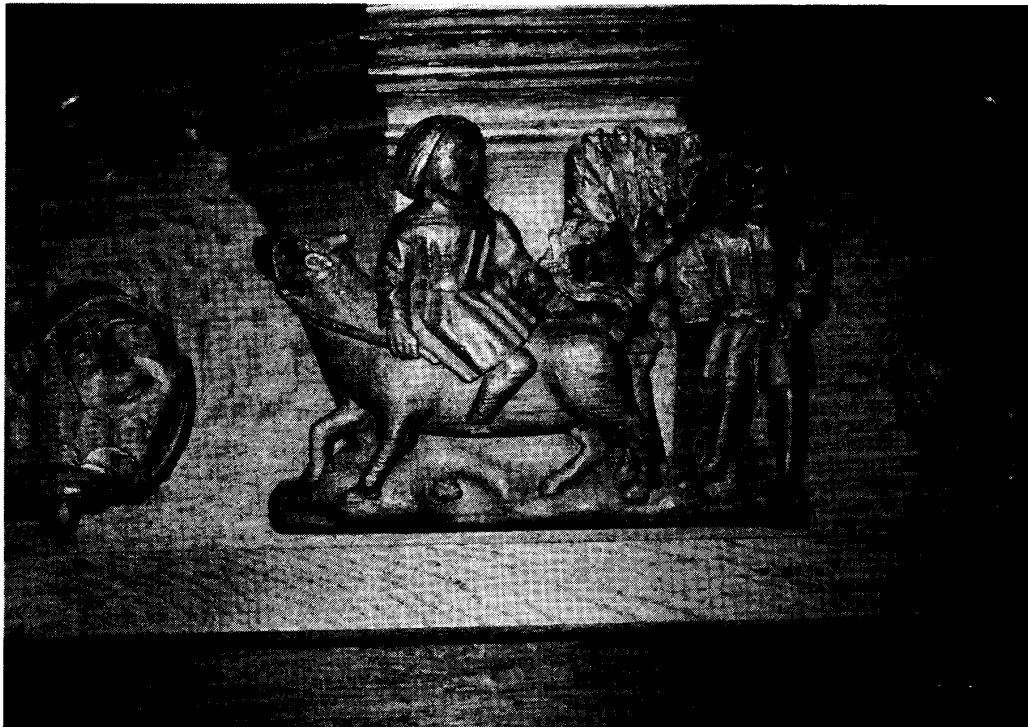
(1)-(b) N(U f.W)18



(2) Boston. (ca. 1390) N(U f.E)8

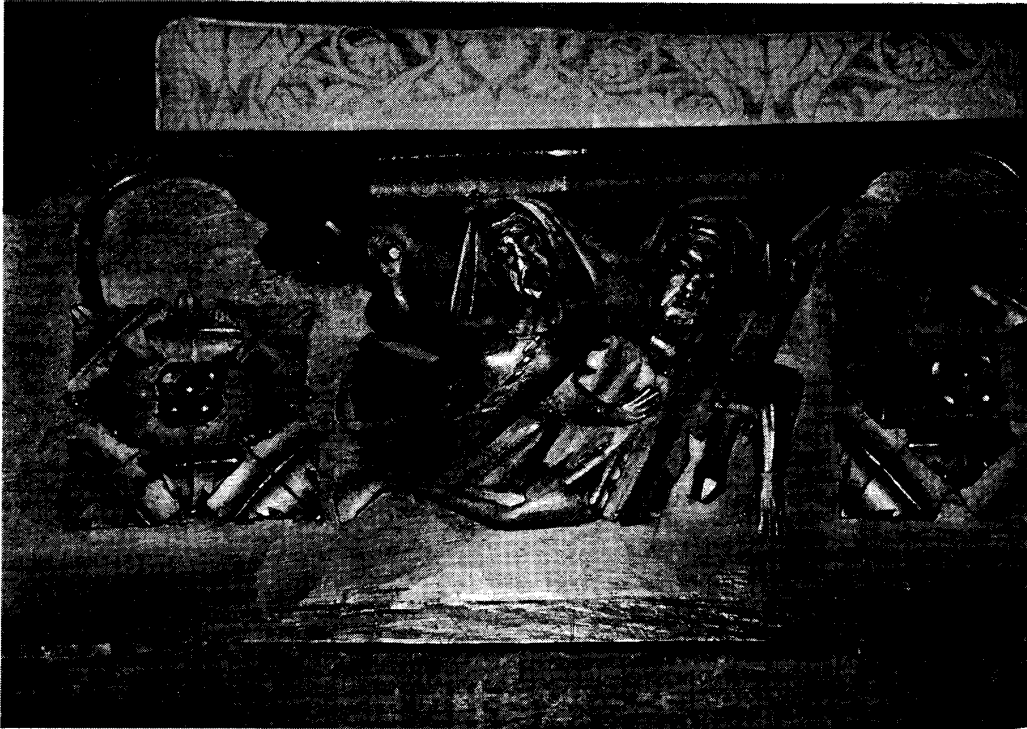


(3)-(a) Bristol. The Cathedral. (late 15th C) S(f.W)11



(3)-(b) S(f.W)2

「ノアの妻」再考



(4) Carlisle. The Cathedral. (1399-1413) S(f.W)7



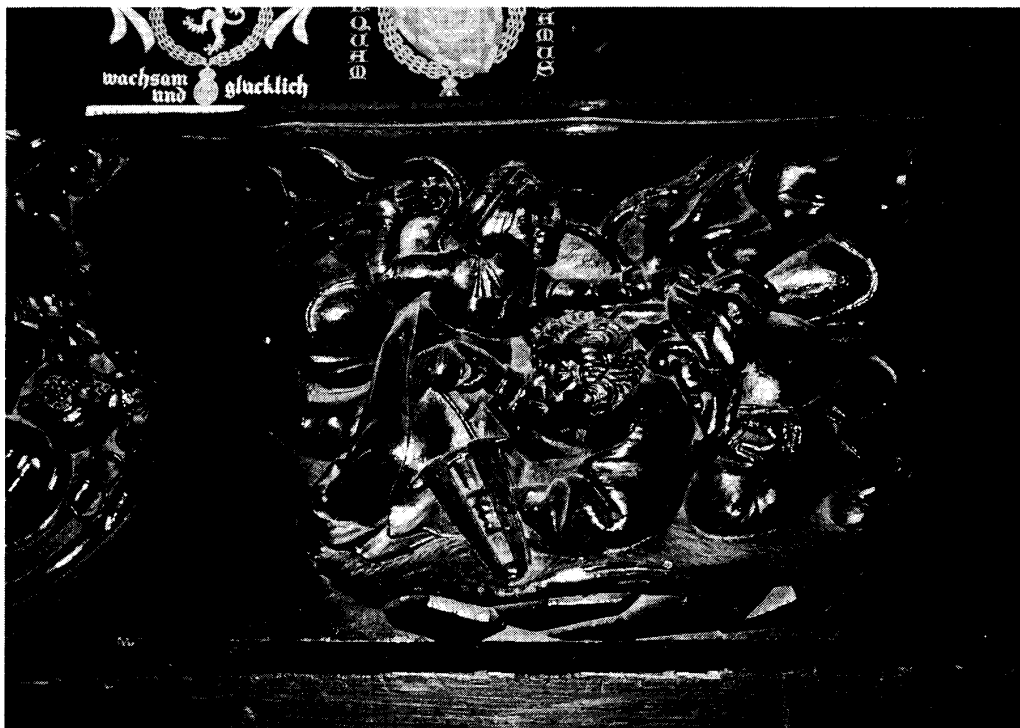
(5) Chester. The Cathedral (N f.W)13



(6) Ely. The Cathedral. (ca 1340) S(L f.W)16



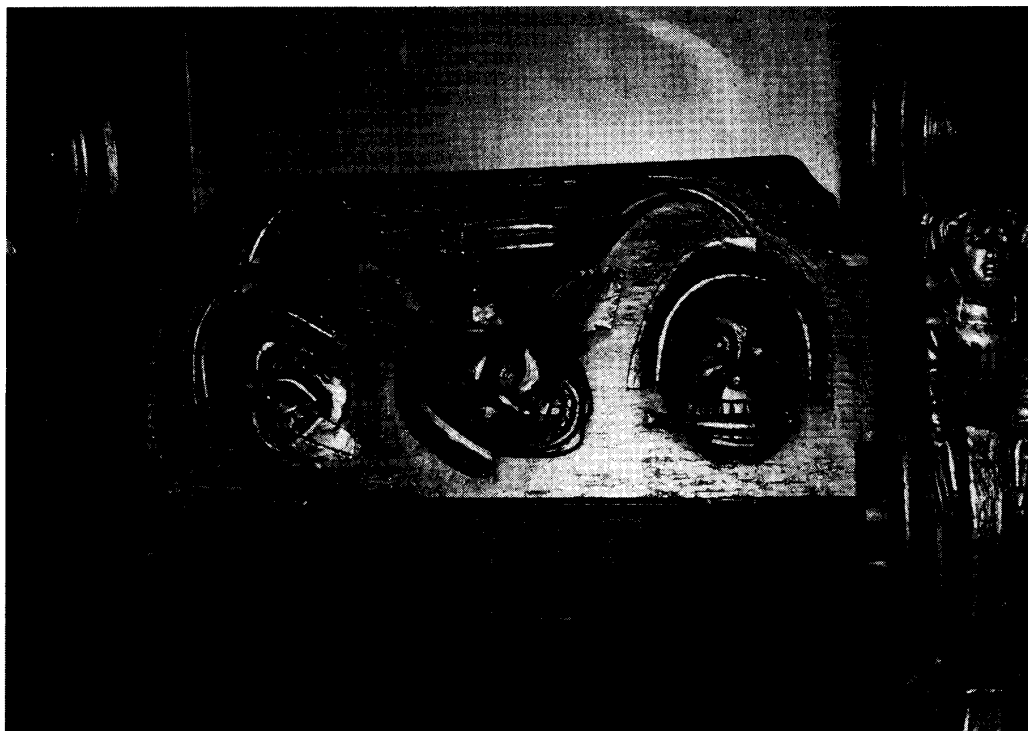
(8)-(b) Great Malvern. The Priory Church.
N(U f.W)5 (ca 1480)



(11) London (Westminster). The Abbey, Henry VII' Chapel (ca 1509)
(a) S(3rd bay, L f.E)6



(11)-(b) S(3rd bay, L f.E)7



(15) Stratford-upon-Avon. Holy Trinity Church. (late 15th C)
(a) S(f.N)9



(15)-(b) S(f.W)12



(15)-(c) S(f.W)13

Select Bibliography

I Texts

Baker, D.C. et al., eds. *The Late Medieval Religious Plays of Bodleian MSS Digby 133 and E Museo 160*. EETS. OS. 283 London: Oxford Univ. Press, 1982.

Beadle, Richard, ed. *The York Plays*. London: Edward Arnold, 1982.

Cawley, A.C., ed. *The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle*. Manchester: Manchester Univ. Press, 1958.

Luminansky, R.M. & Mills, David, eds. *The Chester Mystery Cycle*. EETS. SS.3 & 9, 2 vols., London: Oxford Univ. Press, 1974 & 1986.

Spector, Stephen, ed. *The N-Town Play*. EETS. SS. 11 & 12, 2 vols., London: Oxford Univ. Press, 1991.

II Criticism

Alford, Violet. "Rough Music or Charivari." *Folklore* 70 (1959), pp. 505-18.

Anderson, M.D. *Drama and Imagery in English Medieval Churches*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1963.

———. *History and Imagery in British Churches*. Edinburgh: John Murray, 1971.

———. *Misericords*. Hermondsworth: Penguin Books, 1954.

- . *The Medieval Carver*. Cambridge: Cambridge Univ. P., 1935.
- . *Lincoln Choir Stalls*. Lincoln: The Friends of Lincoln Cathedral, 1967.
- Babcock, Barbara A. *The Reversible World: Symbolic Inversion in Art and Society*. Ithaca: Cornell Univ. P., 1978.
- Bakhtin, Mikhail. *Rabelais and his World*. Cambridge: Cambridge Univ. P., 1968.
- Bond, Francis. *Wood Carvings in English Churches*. 2 vols., Oxford: Oxford Univ. P., 1910.
- Burke, Peter. *Popular Culture in Early Modern Europe*. London: Scholar Press, 1994.
- Davis, Natalie Zemon. "The Reasons of Misrule: Youth Groups and Charivaris in Sixteenth Century France." *Past and Present* No. 50 (1929), pp. 41-75.
- . *Society and Culture in Early Modern France*. Stanford: Stanford Univ. P., 1975.
- Edminson, V.M. *Ancient Misericords in the Priory Church of St. Mary and St. Michael, Great Malvern*. Worcester: Baylis & Son Ltd., 1957.
- Grundy, Thirlie. *Cry Pure, Cry Pagan in Carlisle Cathedral*. Carlisle: Thumb Print, 1994.
- Hazlitt, W.C. *Faiths and Folklore of the British Isles*. New York: B. Blom, 1965.
- Ingram, Martin. "Ridings, Rough Music and the 'Reform of Popular Culture' in Early Modern England." *Past and Present* No. 105 (1984), pp. 79-113.
- Jones, Malcolm. "Folklore Motifs in Late Medieval Art I: Proverbial Follies and Impossibilities." *Folklore* vol. 100: ii (1989), pp. 201-17.
- . "Folklore Motifs in Late Medieval Art II: Sexist Satire and Popular Punishments." *Folklore*. vol. 101: i (1990), pp. 69-87.
- Kraus, Dorothy and Kraus, Henry. *The Hidden World of Misericords*. London: Michael Joseph, 1975.
- Laird, Marshall. *English Misericords*. London: John Murray, 1986.
- Morgan, F.C. *Hereford Cathedral Church Misericords*. Hereford: The Cathedral, 1975.
- Phipson, Emma. *Choir Stalls and their Carvings*. London: Batsford, 1896.
- Phythian-Adams, Charles. "Ceremony and the Citizen: The Communal Year at Coventry, 1450-1550." *Crisis and Order in English Towns, 1500-1700*. ed. Peter Clark and Paul Slack. London: Routledge and Kegan Paul, 1972.
- Remnant, G.L. *A Catalogue of Misericords in Great Britain*. Oxford: Oxford Univ. P., 1969.
- Rubin, Miri. *Corpus Christi: The Eucharist in Late Medieval Culture*. Cambridge: Cambridge Univ. P., 1991.
- Smith, J.C.D. *A Guide to Church Wood Carvings*. Newton Abbot: David & Charles, 1974.
- Spargo, John Webster. *Juridical Folklore in England Illustrated by the Cucking-Stool*. Durham, N.C.: Duke Univ. P., 1944.
- Tasker, Edward G. *Encyclopaedia of Medieval Church Art*. London: Batsford, 1993.
- Thompson, E.P. "'Rough Music': Le charivari anglais," *Annales: Economies, Sociétés, Civilisations* 27 (1972), pp. 285-312.
- White, Mary Frances. *Fifteenth Century Misericords in the Collegiate Church of Holy Trinity, Stratford-upon-Avon*. Stratford-upon-Avon: Philip Bennett, 1974.

III 邦文文献

フリオ・カロ・バロッハ(佐々木 孝訳)『カーニヴァル』法政大学出版局 1987年

「ノアの妻」再考

- イヴ=マリ・ベルセ(井上孝治監訳)『祭りと反乱 16~18世紀の民衆意識』 新評論 1980年
- N・Z・デイヴィス(岩崎宗治訳)「シャリヴァリ・名誉・共同体—17世紀のリヨンとジュネーブ」『思想』
746号(1986)pp. 187-204
- 近藤和彦「シャリヴァリ・文化・ハウガース」『思想』746号(1986)pp. 155-85
- 蔵持不三也『シャリヴァリ—民衆文化の修辞学』同文館 1991年
- 二宮宏之他編『魔女とシャリヴァリ』アナル論文選Ⅰ 新評論 1982年
- ヴィクター・ターナー(梶原景昭訳)「カーニヴァル—社会の反省作用」『象徴と社会』文化人類学叢書 pp.
305-43 紀伊国屋書店 1981年